



最初
の
指南書

京都タロット宇宙メサージュ®

岩倉ミケ

試し読み Sample

目次

はじめに	
『京都タロット宙のメサージュ 6』の誕生	3
一、京都タロットの世界	
夢、そして シンボリズムの宇宙へ	7
「和」のセンス・オブ・ワンダー	10

はじめに

『京都タロット宙のメサージュ 6』の誕生

京都タロットの構想をはじめたのが、十四年前のこと。それから二年経ったころに、画家の江田朋百香さんと知り合い、カード絵をお願いした。七十八枚すべてのカード絵を描き上げてくださったのが二〇一五年末で、京都タロット原画展として発表したのが、翌一六年。そして、ようやくカードという形になったのが二〇一八年のことである。ずいぶんと時間を掛けてしまったと振り返る。

箱の中に収められた、この美しいタロットカードを取り出して眺めてみると、一枚一枚にメロディーが感じられる心地がする。朋百香さんが、全てを捧げるように描いてくださったその時々が懐かしく思い出され、それはちょうど「昔の曲を聞くと、当時の思い出が蘇る」という感傷に近い。

もともとライフワークの夢分析の一環として、私はタロットカードと親しんでいた。夢見とタロットのそれぞれのシンボルと、現実との妙なる繋がりを発見するのが楽しくて、のめり込むようにタロットに興じていた毎日。

しかしなぜか、西洋由来のタロットに微妙な違和感を覚えはじめ（和のモチーフのタロットがあればいいな）と願い始めていた。あの頃は、自分で制作しようという思いは全くなく、そのうち誰かがやってくれるだろう……と、ぼんやりと、そんな気持ちでいたのを覚えている。

西洋タロット解釈の中で、よく登場する『アーサー王伝説』『円卓の騎士の物語』とも呼ばれ、ヨーロッパで広く知られている英雄譚がある。今や日本でも、ゲームの題材として知る人も多いそうだ。その物語は、精神の成長に関する深い洞察に溢れている。カード理解を深めるためにも、西洋の様々な伝説を学ぶ作業は楽しい過程には違いなかったが、私にはどういいうわけか、何かしらしっくりとこない感じがぬぐえなかった。「日本人なら『八岐大蛇^{やまたのおろち}』の物語ではないだろうか」などと、想うことをノートに控えはじめ、気づくと構想に着手していた。

その頃『タロー・デ・パリ』という新しいタロットが誕生した。パリの街へのリスペクトに溢れた美しい絵柄を目にしたとき、私は構想用の小さなノートや、走り書きした紙切れの中にあるものを、秘かに『京都タロット』と呼びはじめた。名前を付けたとた

ん、それは不思議とリアルに感じられるようになり、この世界に『京都タロット』なるものを顕現させたいと、強く願うようになっていったのだ。

言うまでもなくタロットカードはカード絵こそが命。「京都」を冠するからには、和のテイストに満ちた神秘性のある図柄が絶対に必要と考えていた。そんな折、スターポエッツギャラリーで女神のイラストと出逢うことになった。

朋百香さんという絵描きさんを知ったのは、その時が初めてだった。私はテーブルの上に置かれていた画集をまさぐるように眺め、求めているその人との邂逅かいこうに興味し、発作的に彼女の前に歩み出て、ひざまずくようにカード絵の件をお願いしたように記憶している。

「実は私も2年くらい前から、なぜかずっとカード絵というものを描いてみたかったです」と応えてくれた朋百香さん。私はこの時のことを思い出すと、今も胸が熱くなる。

心血を注ぐという言葉があるが、カード絵を描く朋百香さんは、まさにそれ。また製作行程において、驚くべきことに、カードのテーマに沿う出来事が、私たちの人生にその都度発生し、その体験の中でカードは必然的に現われてくるかのようにであった。

こんなふう一枚一枚、丁寧にカード絵は誕生していった。朋百香さんと私は、気質や感性も近いようで、いわゆるツートンと言えばカーの仲。微妙なニュアンスも、阿吽あうんの呼吸で、ずっと理解してもらえたので、その点なんの苦労もなかったように思う。朋百香さんとはひとまわり違うけれど、彼女の大らかさに甘えて、私は対等に関わらせていただいた。おかげで、いつも率直な意見交換ができたし、なによりも、やりとりが楽しかった。

この本は、七十八枚すべてのカード解説はもちろん、京都タロットの骨格の部分も、念入りに書いた専門書である。基礎講座と同じ内容の箇所も多く、じっくり取り組みたい人には、本当に楽しんでいただけるものとなったと思う。

また、カードの意味がわからなくても、画家江田朋百香のアートとしても存分に楽しめるのが、この美しい京都タロット。まずは手にとって、味わっていただくことから始めてもらえればと思っている。

一、京都タロットの世界

夢、そして シンボリズムの宇宙へ

『京都タロット宙のメッセージ』は西洋の伝統的タロットカードと同じく、大アルカナ二十二枚、小アルカナ五十六枚の全七十八枚からなるタロットカードである。当然、占うための道具としてあるので、原則としては何を訊ねても自由だが、まずは「自己対話」のきっかけとなるように作っている。

「自分と率直に向き合う」ということが、京都タロットと触れ合うための基本姿勢だからだ。自己対話から導かれるところは実はとても大きく、最終的には「世界の幻想性に気づく」ところへ繋がる。なにか唐突な感じを受けられるかもしれないが、これは究極のテーマであって、ここで理解できなくても全く問題はない。

この指南書では、京都タロットの深遠な世界観について順を追って説明していく。単に知識としてではなく、心から理解をしていただけるように意図しているので、じっくりと感じながら読み進めていただければと思う。

まずは、京都タロットに親しむことで目指す二つの大きなテーマをお話しよう。

- ・ヨミガエリと成就
- ・女神性の発見

この二大テーマを深く理解していくことは、究極のテーマへ続いていく。その背景として、私が長年取り組んでいたことを先に話したい。

私は三十年くらい前から、夢日記の記述を習慣にしており、それを元にしたシンボリズム（象徴学）を探求している。

夢日記を付けるようになったのは、少女時代のある至高体験に遡る。詳しいことは、著書『夢見レッスン帳』に記したので、ここでは簡単に述べるに留めるが、その体験は当時の小娘だった私にしてみれば、比較すべきものが何もないような強烈なもので、無機物の中にさえ「生命」を感じ、全てが光り輝くのを「全身で」見るというような経験であった。あまりに鮮烈なことであったので、今もその日の日付を覚えていて、中学二年の十一月二十二日の早朝であったと記憶している。

その当時の感覚で話すと「生まれ変わった」ように感じ、「嫌いな人が、ただの一人もいなくなる」という多感な少女にとっては稀な感覚でもって現れ、「それ」は、私のその後の娘時代を、約五年に渡り守ってくれることになったのだ。

夢日記をつけ始めたのは、あの至福感を損なってしまったことによる。この消失からくる焦燥感に、私は二十数年の間、苦悩することとなった。もう一度、あの日々を取り戻そうと行き着いた答えが、非二元的な本質探求だった。

当時は、もちろんインターネットもなく、実際は書籍くらいしか頼るものがなかったが、「あれ」については人に理解してもらえないわけではないという思いが強く、仲間を求めることもしなかった。だれにも言えない、ただただ孤独な探求だった。

どうすればいいのかと、もがく中で思い当たったのが「夢見」だ。夢見なら、私の「無意識」を見ることができるといえる嘘のないツールだ。だから、ひよっとしたら「あれ」に繋がっているかもしれない！

そう感じた私は夢を記録するようになった。思えば、もともと鮮明に夢を見るタイプだったこともあって、特別な努力とは微塵も思わず、昼夜なく、すっかりのめり込んでしまったのだ。

まもなく「夢変容」と名付けた、いわゆる「明晰夢」を頻繁に体験するようになり、夢見のコントロールも覚えた。（このテーマは『夢見レッスン帳』で述べた通り）。

ただ、当初の目的だった「あれ」がすぐ取り戻せたわけではない。しかし夢見を通じて、言わば副産物的に発見したことこそ、のちに京都タロットの創始につながるシンボリズムの世界である。

私は探求の中で、神話の神や女神、それにまつわるシンボルやストーリーが、個人の内に展開されていることを発見して心躍った。神話や民話などのメルヘンが私たちの意識化において共有されていること、また、それらが更新され続けていることも実感して、シンボリズムの面白味の世界に没入した。

そう、この指南書の中で何度も繰り返すことになるだろうが、夢見探求の中で、最も大きな発見というのが「私たちの中には、神話の神や女神が生きていて、神々の物語が再現されたものを人生と呼んでいる」ことである。そういう意味では、この指南書はテイストが全く違うものの『夢見レッスン帳』の続編という側面もあるのかもしれない。

夢見の世界と現実世界との妙なる繋がりの実感は、本来の目的だった非二元探求を棚上げにさせてしまうほどの魅惑的なものではあったが、このことは決して迷走とはならなかった。横道や失敗から予期せぬ発見につながった発明家のように、必要なプロセスを「歩ませられていた」と今は理解している。シンボリズムの探求は、(人によっては)本質に気づくためのとても有効な過程となるのだ。

さて、このシンボリズムの宇宙にタロットの世界は位置している。シンボリズムとは、シンボルに含有された意味を見出す学びだが、これがタロットの世界に「下りる」ことで、観念的な知識に過ぎなかった記号に「生命」が吹き込まれ、自らの中の神話を掘り起こす作業に変容する。

京都タロットは、一般的な西洋タロットの図柄のような抽象的なシンボルが散りばめられているカードとは違い、もっと具象的で物語的だ。そのためカードの背後に、日本人に馴染みの物語が見えてくるようになっている。

「和」のセンス・オブ・ワンダー

日本人の感性に「しっくりくる」ものにするためこだわったことは「和」のモチーフだからこそその解釈をすること。

同じモチーフでも世界には様々な解釈があって、地域によって違いがある。

たとえば「龍」を例にとろう。

龍は東西とも架空の動物であることには違いがないが、解釈がまったく違い、神話の中での役割も違う。中国での龍は強さと幸運を表し、皇帝の象徴として王の威光を示すモチーフであることが知られている。

また、いにしえより中国からの影響が強い日本においても、龍は神として崇められ、雨を降らせるなど天候を左右させる力を持つ存在とされる。寺院の天井画や壁画をはじめ、神社の手水舎など、龍は神として描かれ配置されている。

しかし、西洋における「ドラゴン」は、悪魔的なものの象徴としての立場が強く出るようで、見た目にも違いがあり、羽が生え醜悪な表情で火を吐くこともある。

東西での違いが顕著な龍・ドラゴンだが、もちろん、東洋にもヤマタノオロチ神話をはじめ、厳密な意味での「龍」とは違う場合もあるものの、乱暴な霊獣として描かれるパターンは日本各地で存在するし、西洋でも英雄を手伝う場合もある。それでも東洋と西洋とでは、龍・ドラゴンのシンボリズムは、おそらく大きな差があるのだろうと考えられる。

伝統的なタロットを学ぶ途上、微かな違和感を覚えたものが、私にとっては西洋のモチーフの馴染みのなさであった。それらを勉強することは、新たな言語を覚えていくような楽しさと向上心をかき立てられることではあったが、やはり外国語を学ぶ時のように、西洋的なモチーフを自分の意識上で「変換する」というひと手間が、気持ちの中でどうしても薄紙を一枚はさんだような異質な感覚を覚えることになっていた。

もちろん、この異質感・違和感という問題は、たとえば外国語習得が早いタイプの人にもいるように、大いに個人差のあることなのだろうと思う。おそらくは「ご縁」や「時代」によって、この問題は「問題ではない」層の人はいるし、そのような方にとっては、西洋の伝統的なタロットの方が肌に合うということもあるに違いない。

京都タロットは、当時の私のように、その「薄紙一枚」の異質感がやりすごせなかった人にまずは向けられている。京都タロットの販売をはじめて二年程度だが、この薄紙

一枚のために、タロットが覚えづらかったと感じていた人たちが少なからずいる、という感想を持っている。

それ以上に多いのが、タロットなど全く興味はなかったが、朋百香さんの描くこの和風のタロット画にシンパシーを覚えて習いたいという人たちである。このカード絵だからこそ、縁もゆかりもなかったタロットカードに強く心惹かれる——このような感想を抱く方々にこそ、私は京都タロットとご縁のある人ではないかと思っている。

さて京都タロットは現在、制作当初に考えていた、西洋タロットを和のモチーフに単純に置き換えたカードというものとは全く違った要素を持つものになった。それは、制作中の十二年の間に自然発生的に見出され、まさに「今」着地したようにも思えるし、不思議と最初から決まっていたようにも感じられる。

それが、先に述べた京都タロットならではの二大テーマである。

私は、これらを「和のセンス・オブ・ワンダー」と呼びたく思う。センス・オブ・ワンダーとは「不思議、神秘を感じ取る感性」とでも訳されるだろうが、この場合の「不思議」とは、誤解されがちな「靈感」という意味ではなく、あらゆるところに「生命を観る」という感性のことでもあるし、本質を見抜くという意味もある。

もちろんセンス・オブ・ワンダー自体は各国共通の感性で、あえて「和」ではない。しかし、和のモチーフや日本の物語のシンボリズムを通じて、日本人だからこそ深めていきやすい感覚があると感じる。

日本の国土は、言うまでもなく狭い島国である。拓げていくには、まもなく限界を感じる狭い国土だからこそ、私たちは知らず知らずのうちに、独特の感受性を発展させたのだと考えられないだろうか？

狭い国の上では、自らの領域を拓げることが不可能な私たちが意識下において、いつのまにか身に付けていた感性とは、足元をひたすら「掘る」作業だったのではないだろうか？

それは「洗練」あるいは「研磨」とも言い換えられる。

たとえば、小さな大地の上ではダイヤモンドを探す作業はすぐに限界がくる。しかし私たちは、たった一つのダイヤモンドを、その場でただただ磨き続けることはできる。そして、それこそが日本人の特性となった。ものづくりや経済や産業のシステムの発展における私たちの洗練の技術は、島国ならではの思える。

あるいは、中国から輸入された「禅」が日本において美しく洗練され、進化というより「深化」を極めたのも、足元を掘り続けるという精神的な在り方からくるのではないだろうか。

私たちのコミュニケーションは、空に向かって叫ぶことをあまり美德としない傾向にあるように思う。それより足元にある地面を掘って、大地に響かせて届けようとする。

江戸期、鎖国という完全なロックダウン政策が、二百年以上も成功していたのは、日本が島国だという地理的要因も大きいだろう。国の封鎖という異常な状態を、個人的には決して好しと思っているわけではないが、私たちは「鎖国」の本質を「精神的」に捉え直すことはできないだろうか。

外を遮断して、内側だけで満たす。

私は、このようなあり方を、禅が深化した文化のあり方として再評価し「精神の鎖国」と名付けたく思う。

おわかりだろうか？

私たちは、おそらく「自身」を見つけやすいのだ。「外」に目を向けるより、一途に「内」に目を向けることによって。

私たちの歴史を通して育まれてきた、和のセンス・オブ・ワンダーを、京都タロットを触れながら改めて味わっていただければと思う。

** 《続きは、本編を購入するとご覧になれます。》 **

【試し読み】京都タロット宙のメサージュ® 最初の指南書

著 岩倉ミケ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
